

やはり俺に負の感情が  
無いのは間違っている

ハナハピ

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

何かをしていて辛いと思ったことはないだろうか？何かを言われてムカついたことはないだろうか？

悲しいと思ったことは？寂しいと思ったことは？悔しいと思ったことは？

恐らく誰しもが経験したことがあるだろう。

ソレらは《感情》といった器官の一部だ。

人間なら誰しもが持ち合わせている感情だ。

それは、人にあつて当然の感情だ。

例えば、怪我をしたら痛くて辛い。

例えば、一人で居たら虚しくて寂しい。

例えば、勝負に負けたら悲しくて悔しい。  
ならば。

そのマイナスの感情を何処かで失くしてしまつたら？

それ以外の感情があつても、そういつた感情がなかつたら？

痛いとは思えても、辛いとは思えなかつたら？

これはそんな物語。

負の感情が欠けた少年の物語。

\*作者は文才がありません。許してください\*

# 目次

やはり彼と彼女は優し過ぎる。

36

やはり俺に視線が集まるのはまちがつて  
いる。 | 1

やはり俺が誰かと一緒に帰るのはまち  
がつている。 | 6

やはり俺が日曜日以外に出るのはまち  
がつている。 | 12

やはり俺が有名になるのはまちがつてい  
る。 | 20

やはり俺がクラスメイトと勉強するのは  
まちがつている。 | 26

やはり俺の担任教師はまちがつている。  
| 31

やはり俺に視線が集まるのはまちがっている。

「おにーちゃん!!起きてー!!」

「…おーう…」

いつも通り下の階から聞こえる妹の声で目覚めた俺は、眠気を吹っ飛ばすべく洗面所へと向かう。

バシャバシャと顔に水をかけ、見事眠気を吹っ飛ばす事に成功した俺は、妹が待つリビングへ。

「おはよ、お兄ちゃん」

「ああ、お早う。小町」

比企谷小町。

それが俺の妹の名だ。

「飯はー?」

「はいはい、もうすぐですよー」

俺の家は両親が共働きなので、朝や夜は小町か俺が料理している。

いや、正確に言えば小学生の頃まではまだ俺が作っていた。

けど、まあ、よく出来た妹だからな。俺が中学2年となった今では小学6年生の小町が作っている。なので実質これから料理をして行くのは小町だ。

「お兄ちゃん、もう小町の迎えに来ないのー？小町の同級生が会いたがつてるよー？」  
「いや、俺に会いたい奴なんてそうそう居ないだろ。今も女子に呼び出されて告白されるドツキリとかやられてるからね？まあ断ってるが」

アレ、断らずにOK出したら絶対物陰から知らない奴らが出てきて「ブークスクスW」って笑いものにされんだろ。

俺の家の家訓が《お前はモテない》じゃなかったら危なかった。

今更だけどこの家訓俺限定じゃん家訓じゃねーじゃん。

「いやー、それ多分ガチだと思うんだけどなあ…。お兄ちゃんの鈍感」

「ばっかお前。俺超鋭いだろ。鋭すぎて自分の事を諦めたレベルだぞ」

もう俺悟り開けるだろ。

「まあ、お兄ちゃんだから諦めたよ小町は。じゃあ小町先行くからねー鍵よろしく！」

「あいよ〜」

さて、俺も学校行きますかね。

「(ねえ、あの人かっこ良くない?)」

「(ホントだ! ヤバイ超タイプ!)」

「(話掛けて来なよ~)」

「ハア…」

またか。

周りから来るこの視線。

そしてヒソヒソ話。

俺どんだけ嫌われてんだよ…。

「おはよ~比企谷君」

「ああ、おはよう」

まさか俺に挨拶してくれるなんて…。

いい人だ…えつと…名前わかんない人。

その後、何人かの見知らぬ女子生徒に挨拶をされ、俺はちよつと感極まっていた。

いい人多いなこの学校。

男子からは一度も声かけられなかったが。

上履きに履き替えようと下駄箱を開けると、そこには一通の手紙が。

ああまたか。

なんだよこの学校偽告白流行ってんの？

一応貰ったものなので、内容を読んでから、鞆を中にしまふ。

そのまま教室に歩いて行き、教室のドアを開けると、大体の女子が此方を向いた。

ああ、うん、また俺の悪口言ってたのね。

俺めつちや嫌われてんな…。

「おつはよ！比企谷!!」

「ん、おはよう折本」

鞆を置いた俺に話掛けてきたのは折本だった。

こいつは俺に分け隔て無く話掛けて来てくれるいい奴だ。

「ねえ比企谷。比企谷って部活入ってないよね。それってなんで？」

「ん、ウチは両親共働きでな。俺が部活入ったら妹が一人になっちゃうだろう？」

「うわ、何それウケる」

「いや、ウケねえから…」

唐突の質問だったので思わず本当の事を話してしまった。

ヤベエな他の人からシスコンキモツとか言われて無いよな？

「ホラ、折本も早く戻れ。先生来るぞ」

「ん、そだね。……ねえ比企谷。放課後、さ…一緒に…帰らない？」

そう言った折本の頬は少し赤く、何故かモジモジしている。トイレ？



「んー、少し用事あるが、それが終わったら大丈夫だな」

俺は放課後呼び出されてるしと続けようとしたが、身乗りだした折本によって続けられなかった。

「ほ、ホント!?!」

「お、おう…」

俺は折本の余りの必死さにちよつとビビっていたが、なんとか返事をする。

「よ、良かったあ…」

「何がだ?」

俺が折本に尋ねると、折本は顔を真っ赤にしながら「な、なんでもないツ!!」と言って自分の席に戻っていった。

……何が良かったんだ?

やはり俺が誰かと一緒に帰るのはまちがっている。

「その、比企谷さん！好きです！付き合ってください！」  
放課後。

俺は嘘告白によって呼び出された場所に行き、待っていた仕掛人（告白役）の人と対面する。

さて、観客はどこにいるのか。

まあどこにしようが関係ない。

俺がこの嘘告白で返す言葉は決まっている。

誰が、どんな風に告白してきても、いつも返すのはこの言葉だ。

「—————めんなさい」

—————

さて、嘘告白の件も終わり、俺は今一緒に帰る約束をした折本を探している。  
てか、いっつも思うけど嘘告白の時の観客って隠れるの上手いよな。

まるつきりどこいるかわかんねえもん。

もう本当に2人だけだと思っちゃうレベル。

にしても、いないな折本……。まさかただ単に俺で遊んだって訳じゃないよね？俺を置いて帰ったとかなないよね？違うよね？

そんな風に考えながら、校門の前でキョロキョロしてる俺。

ヤベエな不審者じゃん俺。

時々女の子と目が合うが、その中の8割は顔を赤くして目を逸らしてしまう。

そこまでキモいか…俺…。

視界にも入れたくないか…。

まあいいさ。分かってた事だしな。

つと、無駄な事を考えていた。

折本を探さなければ……うん、いない。

折本ホントに俺の事置いて帰ったの？

「ひ、比企谷、お待たせ！」

噂をすればなんとやら。

どうやら折本は俺の考えていたような奴では無かったようです。

「ちよつと先生に呼ばれてて！長びいちゃった!!ごめん！」

「いや、気にすんな。俺もさつきまで用事あつて来たばっかだしな。それより、早く帰ろ

うぜ。小町が家で待つてるだろうしな」

「なにそれ、マジウケる」

「いや、ウケねえから…」

「ねえ、比企谷つてさ、何処の高校行こうとしてるの？」

「んー、俺は総武高校かな。近いし」

「ん？比企谷つて頭良くなかった？もつと上行けるんじゃない？」

「いや、ここら辺で一番頭いいのは総武高校だろ。あんまり遠くはダメだし、やっぱ総武

高校だな。折本はどうするんだ？」

「私？私も決まったかな。(たった今)」

「ん？最後の方なんて言った？」

「な、何でもないッ！」

まあ、こんな感じでなに一つ面白味のない普通の話をしながら、俺達は家へと帰っていった。

いや、面白さとか良くわかんないし。

そんな俺に求められても…ねえ？

ハチマンワルクナイ。

「じゃあ、私こっちだから」

「ん、おう。じゃあな」

「バイバイ。比企谷」

さて、俺も小町が待つ我が家へ帰るとしますか…。

「お兄ちゃんお帰りー！」

「おう、ただいま小町」

帰宅して、まずは小町へ挨拶。

その後靴を指定の位置へと置き手を洗ってくるのが俺のパターンだ。しかし、今日は何時もと違ったらしい。

知らない靴が何足かある。

「今日小町の友達が来てるから、挨拶してね〜」

「ん、分かった」

そう言つて靴を置き、洗面所で手を洗う。

「(小町ちゃん誰だったの〜?)」

「(ん〜? お兄ちゃんだった)」

「(えー!? 小町のお兄さん!? やった!)」

「(小町ちゃんにお兄さん居たんだ〜。どんな人?)」

「超かっこいい人！もうファンクラブとか出来てもおかしくないくらい！」  
向こうが騒がしいな…。

まあどうせあれだろ。好きな人とかだろ。

小学校の頃よく聞かれたなあ俺。

「最近の小学生は好きな人を教え合うものなの！」って鬼気迫った顔で聞いてきたからな。その癖他の男子には聞かない女子達。

ホントにアレ教えてたら完全に影で笑い者だったろ。

女子って怖い…。

そんなくだらない事を考えつつ、ドアを開ける。

遊びに来てるのは小町含め四人のようだ。

「あ、小町さんのお兄さんこんにちは！」

俺が挨拶する前にされてしまった…。

最近の小学生ってコミュ力高いよ…。

「ああ、こんにちは。俺は二階いるから、くつろいでてくれ」

「は、ハイ！」

「(えー!?あの人が小町ちゃんのお兄さん!)」

「(そっだよ!かっこいいでしょ!?)」

「(うんうん！超かっこいい！彼女とかいるのかな〜)」

「(小町が知る限りいないよ？お兄ちゃん極度の鈍感野郎だから人の好意にも気付かないし)」

「(ホント!?やった！ワンチャンある!!)」

また後ろでなんか言ってるな…。

「ごめんななんかキモくて。すぐ上行くからせめて目の前でそういうのはやめてくれな？」

「んじゃ、俺は二階行ってるから」

小学生達の罵倒が聞こえる前に俺は二階へと逃げる。

そのまま自分の部屋へ入り制服を脱いで普段着に着替えると、突如眠気が襲ってきたのでベットへダイブ。

そのまま眠気に逆らうこと無く、俺は晩飯までの睡眠へと落ちた。

やはり俺が日曜日の外に出るのはまちがっている。

さてはて、今日も今日とて今日が始まる。

今日は日曜日。

一週間の中で最も至福の日にち。

俺は今日は休みというのを実感するために、一度目覚めた意識ををまた眠りの底に鎮めようとする。

つまり、二度寝である。

俺は段々と離れていく意識に逆らうことなく、安らかな眠りへと――

「お兄ちゃん！今日は表に出るよ！」

おちていけなかった。

離れていった意識は一気に小町の手により戻ってきてしまい、脳が段々と覚醒していき。

「小町…重い…」

「小町は重くないです。早く起きないとキスしちゃうよー」

「うっし起きた。小町飯は？」



「うーわつ、流石の小町も傷つくよ……」

当たり前だろ。某千葉の兄弟じゃないんだから。

そんなのお兄ちゃん得し過ぎだろ。

もう向こうの兄弟みたいに歯止めが効かなくなりそうだからダメなんだよ。

結婚申し込んでしまうかもしれん」

「お兄ちゃん、声出てる……」

「え、マジで？」

小町は顔を真っ赤にさせて俺の心の声が声に出てた事を教えてくれる。

ちよつとその反応やめて。

お兄ちゃん勘違いしちゃうから。

「まあいいや、お兄ちゃん、今日はデートしましょう！」

小町はまだ赤い顔を上げて、俺を指差し行言つた。

「……デート？」

—————

午前11時。

俺は家を先に追い出され、駅の前で小町を待っていた。

来る途中や来てから、何度か女の人に「今暇かな？」とか「歳はいくつですか？」と

か「うちの事務所で働いてみない？」とか声をかけられた。

最後の明らか危ないだろ。俺みたいな雇ってどうするつもりだったの？

「ごめん！待ったー？おに…八幡！」

我を八幡と呼ぶ者。

その者、我と同じ血族なり。

うん、平たく言う和小町です。

「…おう、待ったぞ小町。なんで同じ家なのに俺を先行かせたんだよ」

「もー、そういう時は嘘でも今来たって言うところだよー」

いや、こういう時って何？

妹とのデート？

そんなの経験したやつホントに少ねえと思うぞ。

「馬鹿な事言ってるやつ、買い物行くぞ。何買うんだ？」

「はあ…。何のためにお兄ちゃんを先に家から出したと思ってるのかな…。雰囲気台

無しだよ…：…ショッピングモール行く」

「うし、んじゃ早く行くぞ」

「ハア…」

—————

さて、困った。問題発生だ。

今日の前で小町には見せたくないものが映ってしまったている。

今日はちよつと遠出して駅を三つ程行つた所にあるシヨツピングモールへと向かうために電車に乗つた。

車内は別に混んではいなかった。

空いてる席に並んで座ると、何故か俺達の周りが混み始めた。主に女性で。

女性の中にはカメラを向けている者までいる。

いや、空いてる場所もあるんだから別にここに集まらなくても…。

それに録画してる人、盗撮つて知ってる？

まあ、俺はそんな不思議な現象は気にせず、趣味である人間観察を勤しむ事にした。時々俺と目が合う人がいるが、そういう人はすぐに顔を赤くしてそっぽを向いてしまふ。

うん、ごめんなさいねなんか。

俺みたいのと目が合うなんて嫌ですよね。

てか、それならこつち向いてなければ俺と目が合うこともないのに…。

あれか、なんか寝癖とかついてる？

まあ、別にこれは問題ではない。

問題は、車内のドアの前にいる女性と男性だ。

ド 女 男

ア 性 性

といった感じで女性の後ろに男性が立っているという状態なんだが…。

あの二人、異様に距離が近い。

混んでる時ならまだしも、今は全然空いている方だ。

更に言ってしまうえば、男性の鼻息が荒く、そして男性特有のアレがちよつと起きている。

結論。痴漢である。

俺が問題視してるのはコレだ。

幸い、小町はまだ気付いていない。っていうか寝てる。

乗客の何人かはこつちを見ていて気付いていない。

他の人は一応気付いてはいる。

だが、勇気が出ないのだろう。

見て見ぬフリを通してはいる。

「はあ…小町、ちよつと待ってろ」

「んむ…お兄ちゃ…じゃなくて、八幡？」

小町の眠そうな声が後ろから聞こえるが、無視して歩を進める。そして、痴漢をしている男の後ろにつき、相手の肩に手を置き、潰す勢いで力を込める。

俺の身長は中学生の中ではでかい方で、170ある。握力は分かんが、中学の中では強い方だろう。

「いつ…!?!」

男性の顔が苦痛で歪む。

俺はそんな男性に、出来るだけ低くドスを利かせるように声に力を込めて言う。

「おい…次の駅で降りろ。警察に引き渡してやつから」

『間も無く○○○白線の内側までお下がり下さい』

ちやうど電車が駅に着いたらしい。

俺は男性の首根っこを持ちそのまま外に投げ飛ばし、適当な駅員を見つけて呼び込む。

「どうしましたか?」

「実はですね…」

この男性が痴漢をしていた事を話すと、駅員さんの顔付きが変わり、俺に礼を言って

男性を連れて行った。

あの駅員さん怖いな…。

一仕事終えた俺は、また電車へと乗り込む。

すると、周りから拍手が起きた。

一瞬なんの拍手か理解出来なかったが、痴漢を捕まえた事への拍手だろうと理解し、

一礼をしておく。

てか、拍手してた中の女性の人達顔赤かったけど風邪か？

マスクつけろよ…。

「あの…。」

「んっ。」

振り返ると、先程まで痴漢されていた女性が立っていた。

こう見ると顔は整っている人だ。歳は俺より2、3上だろうか。社会人かと思ったが

そこまで歳上では無さそうだ。

「先程は助けて頂きありがとうございます。良かったです。良ければ、お礼をさせて頂けませんか？」

女の人は丁寧にお辞儀をして、俺に提案をしてくる。

「ああ、すみませんご丁寧に。お気持ちはありがたいのですが今日は——私とデートな

ので無理です！——小町」

いつの間にか現れた小町によって俺の言葉が遮られてしまった…。

「ふふ、可愛い彼女さんですね？」

「ああ、いえ、妹なんです」

俺がそう言うと、小町は頬をプクつと膨らませる。

え、何、俺なんか間違った事言った？

「そうなんですか？」

「ええ、まあ…すみません、今日は妹との買い物があるので」

「そうですか…。では、日を改めてお礼をさせて下さい。あ、申し遅れました。私は――」

目の前の女性はそこで一旦言葉を切る。

別に名前聞いて無いんだけど…。

「――雪ノ下陽乃と言います」

やはり俺が有名になるのはまちがっている。

俺は今、ベッドに横になっている。

……………うん、超疲れた。

痴漢から助けた女性は、雪ノ下陽乃と言うらしく、最初は礼儀正しい人だなー、と思っていたのだが、「多分歳上だから敬語じゃなくていいですよ？」みたいなこと言ったら性格変わった。

もうね、ホント、男子の理想みたいな感じの人だった。

身体とか超近づけてきたりして、やわらか…辛かった。

お礼に関しては、なくていいと言ったのだが、なんやかんやで相手の巧みな話術に乗せられてしまい、お礼を後日受ける事となってしまった。

連絡先も見事に犠牲となった。

はつきり言おう。

俺はあの人が苦手だ。

あの人は男子の理想の様な存在。

強いて言うなら完璧な存在だ。



けど、完璧なんかは存在しない。

何某信長が言うように、絶対は絶対無い。

それと同じように、完璧だって完璧に無いのだ。

つまりは、あれはあの人の仮面。

「さしずめ強化外骨格でどこか？怖え…」

ブーブーブーブー…

ん、携帯が鳴ってる。

俺はベッドから手を伸ばし、机の上の携帯を取る。

「電話かよ…」

しかも知らない番号。ヤダ何これ怖い。

プチツと電話を切る。

「寝よ…」

ブーブーブーブー…

「はいもしもし…」

諦めて電話に出る。

誰だよしつけえよ人違いだよ…。

『あ、もしもし比企谷君？』

プチツと通話を切る。

なんだよ今さつき俺心の中で苦手発言したんだけど…。

なんでその人から連絡くんの？

ブーブーブーブー…

「人違いです」

『いきなり電話切るとかひどーい。お姉さん泣いちやう』

「俺に姉いないんで。人違いだと思えます」

『いやー、今日はホントありがとねー？お姉さん助かつちやったよ』

「人の話聞けよ…。」

『いやー、もし比企谷君が助けてくれてなかったら、お姉さんあの人ぶん投げてたし』

「…」

俺の助け要らなかつたんじゃねそれ。

『つていうか、違う違う。そんな話じゃなくて、大変なんだよ！インターネットでリアルタイムのやつ見て！』

「なんすかいきなり…ちよつと待って下さい。パソコンつけるんで」

パソコンをつけ、暫くすると何時もの画面が写る。

そのままインターネットを開き、リアルタイムの記事が載っている場所を開いた。

と、同時に、叫びだしそうになってしまふ。

「…は？」

『ね！大変でしょ!』

そこに写っていたのは、今日の俺だった。

「はあああああ!?!」

今度こそ叫んでしまふ。

そこに載っていたのは動画で、俺が痴漢から雪ノ下さんを助けているところ。

「な、なんで…」

『なんかカメラ構えてた人居たじゃない?多分あの人。どうしようね、私と比企谷君が

有名になっちゃおう!』

電話越しの声は何処か楽しそうだ。

なんでこの状況で楽しめてんだよ…。

その動画の視聴率は、こうしている間にもドンドン伸びて行ってる。

これって犯罪じゃねーの?

「お、お兄ちゃん!今携帯で色々調べてたんだけど、これってお兄ちゃんだよね!?!」

……ああ、もう、最悪だ…。

—————

「ねえ、今日のテレビに映ってたのってあの人じゃない!?」

「(ホントだ! あんなカッコ良くて痴漢まで退治できるなんてもうヤバイよね)」

「はあ…」

月曜日。

今日は何時もより視線が多い。

それもその筈。

テレビまでもが俺の動画を移してくれやがったのだから。

なんか検索結果が多いのを記事にするみたいな奴で見事に俺のが出てきやがった。

お陰様でめちやくちや視線が痛い。

はいはいゴメンねこんなのがテレビ映っちゃって。

食事が不味くなったよね。

数々の視線を受けながら、教室に入っていく。

「あ、比企谷!」

「ああ、折本か…」

「ねえ! あのテレビに映ったのって比企谷だよね!」

「……………チガウヨ?」

「やっぱり比企谷か! 凄いよ! 痴漢撃退するなんて!」

「いや、あれ俺じゃないし。人違いだろ」

「いや、比企谷だね！」

「その心は？」

「靴が同じじゃん！」

しまった。

そういえば確かに靴は入るのが無くて学校に何時履いて行っている靴にしたんだ。

てか、靴まで見てんじゃねーよ折本。

「席につけー」

担任が入ってきたので、皆席に着き始める。

折本も「後で詳しく！」といって自分の席に戻って行つた。

「あー、後、比企谷。後で職員室に来てい」

…もう、ホント、助けなきや良かった…。

やはり俺がクラスメイトと勉強するのはまちがっている。

今日は日曜日。

あの痴漢事件があった日からようやく一週間がたった。

あの後、職員室からの呼び出しをずっと無視し続けた俺は、今自宅にいる。

理由は簡単。休日だからだ。

休日は休む日と書いて休日と読む。

なので、こういう日は自宅一人でゴロゴロするのが正しい休日の過ごし方だろう。

しかし今回の休日は

「ひ、比企谷の部屋って綺麗なんだね……」

何故か、俺の部屋にいる折本によって正しく過ごせなくなった。

今、俺の家には俺以外いない。

両親が共働きだからだ。日曜まで働くとかお疲れ様です。

小町？小町は「お兄ちゃん……ガンバ！」と言って俺にゴムを渡して出て行きました。

色々突っ込みたいたころはあるけれど、とりあえずお兄ちゃんは小町がなんでそんな

の持つてるのか不思議でしようがないよ。

「んで、結局なんの用だったんだ？」

俺の部屋を興味深そうに見ている折本に尋ねる。

すると折本は、思い出したように自分の鞆を漁り始め、俺にノートを差し出してきた。

「比企谷、私に勉強を教えて！」

—————

「んで、ここがこうなつてだな……」

「えーと……ああ、そっか！」

俺が今教えているのは数学。

数学は5教科の中では一番苦手なのだが、まあ折本に教えられる程度には出来ている。

説明していなかったが、俺達の学校ではもうすぐ期末テストが始まる。

今日折本が俺に勉強を教えて貰いに来たのもそれが理由だろう。

「いや、そこはそうじゃなくてだな……」

「ふむ、ふむ……」

折本は中々頭がいい。

俺が言った事を素直に受け入れて、自分の考えで間違っているとこを修正してい

く。

「比企谷って勉強教えんの上手いね！」

「おう、サンキュー。…つと、もう昼じゃねーか。ちよつと休憩にしようぜ」

「あー、そだね」

俺は立ち上がり、グツと身体を伸ばす。

折本も立とうとするが、足をもつれさせたのか、立ちくらみなのか、俺の方に倒れてくる。

ポスッ。

「…大丈夫か？」

倒れてきた折本の肩を両手で支えながら聞く。

折本は俺の胸に顔をうずめているような状態で、顔は見えないが、みるみる内に耳が赤くなっていつている。

「だ、だだ大丈夫!!ご、ごめん!!」

「お、おう…なんかすまん…」

折本の余りの剣幕に此方が謝ってしまった。

「…」

「…」



き、気まずい…。

折本は顔を赤くして俯いてるからなに考えてるかわかんないし、俺は喋るの得意じゃないし…。

「あー、その、まあ、なんだ、昼飯どっか食べに行こうぜ」

「う、うん…」

—————

月曜日。

折本と勉強会をした次の日である。

結局あの後は、特に何事もなく、折本は六時頃に帰って行った。

小町が「どこまでいった?!」「ヤツた!」と聞いてきたが、一体何処で教育を間違えたんだらうか。今日帰ったら教育の仕方を見直そう。

「おはよ、比企谷」

下駄箱から靴を取ろうとすると、後ろから声がかかる。

声からして折本だろう。

「おう、おはよ」

「昨日はありがとね。お陰で今回は親に小遣いUP頼めそう」

「そんな理由で勉強してたのかお前…」

俺に勉強の教えを頼んだのもそれが理由か…。

少しお説教してやろうかと振り返ると、折本が下駄箱を覗いて固まっていた。

「…ひ、比企谷…」

「どうした？」

「ラブレター貰った…」

「マジか」

人が本物のラブレター貰ってんの初めて見た…。

俺？俺も時々貰ってるけど違うよ？だって偽だもの。

「…特に反応ないんだね…」

「ん？ああ、おめでどう」

「そういう事じゃ…もういいや」

そう言つて、折本はラブレターに目を戻した。

「……………ふと、行かせてはいけない気がした。」

けれど、俺は気の所為だろうと、心から来るその危険信号を無視してしまう。

このラブレターの件で、自分の中のナニカが欠落するとは知らずに…。

やはり俺の担任教師はまちがっている。

「ーさて、まあ俺から一週間逃げられたのは褒めてやろう…。覚悟は出来てるな？」  
「心の底からごめんなさい」

放課後。

教師からの呼び出しを無視し続けていた俺だったが、遂に今日捕まってしまった。

何故ここまで怒っているのだろうか。

俺の所為ですねハイ。

「で、一週間も根気強く呼び出し続けた理由はなんですか？斎藤先生」

斎藤佑樹。

俺を呼び出していた教師の名前だ。

何かあると俺を呼び出し、俺に因縁付けてくるとても迷惑極まりない教師なのだが、一週間も粘られたのは今回が初めてだ。

しつこい人って嫌われますよ？

「イヤ、それについてはもういいんだ。お前が助けた雪ノ下さん？がお礼を言いたいって電話掛けてきてな。まあその後お前に直接電話掛けるってなったから、呼び出した理

由は別だ」

「ハア……その理由ってなんすか？」

「お前最近モテ過ぎじゃねーか？ ああん？、と言いたかっただけだ」

「おい教師」

なんて迷惑な教師だろうか。

そこらへんのチンピラと言ってる事が似てていいのか教師。

「まあ、半分冗談だ」

え？ 半分本気だったの？

「……あー、とな……勘違いかも知れんが……ちよつとした会話が耳に入っとな……お前、誰かから恨み買ったりしてねえよな？」

「は？」

斎藤先生の言ってる事の意味が分からず、思わず聞き返してしまう。

いや、俺皆から嫌われてるんで。

何それ分かってて聞いてんの？ 殴りてえ……。

「いや、まあ、心当たり無いならいいんだ。気にしなくていい」

「はあ……。とりあえず帰っていいっすか？」

「おう。帰れ帰れ」

「んじゃ……」

「比企谷」

「……なんすか?」

職員室から出ようとする、斎藤先生が声を掛けて来る。

その声に反応して振り返ると、斎藤先生が真剣な表情で俺を見ていた。

「何かあったら、俺に連絡しろ。俺は教師で、お前は生徒なんだ。遠慮無く頼れ。いいな」

先生にいつもの雰囲気は無く、先生の真剣な言葉が俺に向けられて発せられていた。

「……うっす」

いつもと違う先生に、俺は返事をするので精一杯だった。

—————

家に帰り、携帯を見ると、着信が一件来ていた。

相手は……折本か。

「つたく……ラブレターで呼び出されてたんじゃねーのかよ……」

ピッ、と留守電のメッセージを再生させる。

『あー、もしもし』

……聞こえてきたのは、男の声だった。

『どうも、初めまして。比企谷君でよろしーでしょーか？まあ、比企谷だよな。じゃあ、まあ本題話すね。：折本かおりは預かった。この留守電を聞いたら今から言う場所に来い。早くしろよ？俺は今血気盛んな時期だからさあ：何するかわかんないよ？クハハッ！あ、勿論一人で来いよ？んじや、場所はーーー』

思わず、携帯を握り潰してしまいそうになった。

これは、一体なんの冗談だ？

俺に対する偽告白も大概だが、これは流石に夕チが悪い。

相当イカれてんなこいつ。

俺は言いようの無い怒りを感じつつ、指定された場所を聞くと家を飛び出した。

一瞬、一人の教師が頭をよぎった。

もしかしたら先生が気にしていたのはコレの事だったのかも知れない。

だとしたら、今回の犯人は俺と同じ中学の奴という事になる。

「くそッ……！」

先生の言動を思い出すに、きつと犯人の狙いは折本じゃなく俺なんだろう。

朝の時、やはり止めていればよかった。

自分の直感を信じて、折本を止めていればこんな事にはならなかった。

「くそッ……くそッ……!!」

なら、なんで折本は巻き込まれた？

どうしてこんな事態になった？

「…俺の…」

そうだ、今回の事は、全部。

「俺の所為だッ…！」

俺が何をしたかは分からない。

犯人が誰なのかも検討がつかない。

けど、恐らく俺が原因なんだろう。

その所為で、折本は巻き込まれたんだろう。

それ以上先は考えたく無くて、俺は考えるのをやめてただ目的地へと走った。

# やはり彼と彼女は優し過ぎる。

「よう、遅かったな比企谷君」

指定された場所に向かつてまず聞こえてきた声は、電話を掛けてきた男の声だった。

その声は反響して俺の耳に残り、不快感、苛立ち、恐怖心をより一層引き立てる。

声の聞こえた方へと体を向けると明らかにヤンキーって感じのが2人、その2人に挟まれるように見た目はちよいワル系の男一人と計3人の男が立っていた。年は、全員俺より上だろう。

「折本は…何処だよ…」

ハッキリ言うのと、怖い。

よく物語の主人公は、ヒロインの女の子をチンピラから助けたりしているけれど、いざ自分がそれをやる立場になるととてもない恐怖だ。

けれど、俺はそれ以上に怒っている。

折本を攫ったこいつらに。

人を攫っているのにヘラヘラ出来るこいつらに。

今回の原因であろう…自分自身に。



今すぐにもこの気持ちを鎮めたい。

目の前のこいつらを、思いっきりぶん殴ってやりたい。

「いやあ、にしてもマジでイケメンだなア比企谷君。弟から聞いてはいたが、まさかここまでとは思わなかったよ。ホントローロー」

喋っているのは、真ん中のちよいワル系の男。

俺に電話してきた奴の声だ。

「……よ……」

こいつらを殴ることは、出来るだろうか。

数に表せば3対1。

しかも、その3は喧嘩慣れしているであろう歳上。対して、1は喧嘩も数えるほどしかしたことが無いたかが中坊。

「……せよ……」

殴ることは叶わないかもしれない。

もしかしたら、一撃でやられてしまうかも知れない。

倒れたら、恐らく怪我では済まない。

俺も、折本も。

折本は優しいから、俺が傷付くのを心配する。自分の事より、俺の事を優先する。し

てしまう。

きつとここで俺が逃げても、許してくれる。許してしまおう。

「…返せよ…」

でも、だからこそ、立ち向かわないという選択肢は無い。

折本は、優しいから。優し過ぎるから。

誰かがあいつの心配をしてやらないと、あいつはどんどん傷付いていってしまうから。

だからー、だからー

「ぶっ壊したくなる」「折本を…返せよ!!」

――

………ここは、どこだろう………

………暗い。何か布のようなもので目を塞がれている。

……あれ、なんでこんなところにいるんだっけ…

確か、ラブレター貰って……ラブレターの相手に会って……断って……  
……その後の記憶が無い。

「おーい、愚弟。比企谷君に電話掛けたぞ」

「お、サンキュー兄貴」

声が聞こえる。

私以外にも誰かいるのか。

「にしても、勢いで拉致ったのはいいけどよ、どうすんだよ、その女」

「ああ、ちゃんと俺の想いが伝わったら家に帰すよ。折本さんも、きつと比企谷みたいなのがいるから俺の告白を断ったんだろうし……比企谷さえ消えれば、折本さんも俺の想いを分かってくれるよ」

……片方の男の声には、聞き覚えがあった。

というよりも、1番最新の記憶に残っている。

私に告白してきた男の子だ。

それに、比企谷ってどうゆうこと？拉致って？

状況が把握出来ない。

「……我が弟ながら、その考えには圧倒されるわ。正直、超絶気持ち悪いです」

「別にいいよ。気持ち悪くて。俺には折本さんさえいればいいから。だから、ちやつ

ちやと比企谷の事消してきてよ」

「あー、ハイハイ。なんつーか、比企谷君が哀れに思えて来たわ。一人の女の為に、わざわざここに乗り込んで来なきやならないんだからなア。ま、全力で潰すけど」

やっぱり状況は掴めないけれど、これだけは分かった。

————比企谷が、ここに来るんだ。

多分、私を助けに。

比企谷は、絶対助けに来る。

助けに来てしまう。

彼は、自分の事より、他人の事を優先してしまう人だから。

彼は、とても優しいから。優し過ぎるから。

ねえ、比企谷：あんたの事を見てて、心配する奴だっているんだよ？

比企谷は、たとえ誰だろうが自分が傷付いても救おうとするから。

そんな比企谷を見ていて、私はとても辛いよ？

だから…だからさ、比企谷…。

私の為に、傷付こうとしないでよ。

私は、大丈夫だから。

だから、お願いだから—————助けに来ないで。

41 やはり彼と彼女は優し過ぎる。

そんな私の願いは、このすぐ後に打ち砕かれた。